Nagoya City University

共同研究報告　越境の文学

1　学内研究構成員

森田明、田中敬子、新井透、谷口幸代、土屋勝彦

2　学外研究構成員

沼田充義（東京大学大学院人文科学研究科助教授）

多和田葉子（ドイツ語・日本語作家）

3　研究目的

越境のパラダイムとして提示されるものは、多種多様なトランスカルチュラルな経験である。境界を踏み越える文学とは、旅や移動、探検、移民、亡命、巡礼といった空間的な移動を第一のイメージとして持っている。しかし、そのメッセージは、植民地主義的な観念によって作られた土着性という概念の批判、移民や国境侵犯といった行為を有害と見なし、同化の処方箋によって解決しようとするナショナリズムの相対化、あるいは特定のテリトリーに侵入するアウトサイダーやマイノリティを排除するレイシスト的な発想への批判など、様々な発展性に富んでいる。越境のテーマは、国際性やコスモポリタン、グローバリゼーションといった制度的な文脈を超え出て、ポストモダンやポストコロニアルな条件の中で成立する混交・交雑ないしはハイブリディティの経験を、インターアクションの過程として描出する論理の創造を目指している。またそれはナショナリティや人種に限らず、男女の境界を超え出るジェンダー論からの批判的な視点も内包するものである。

本研究は、こうした越境をめぐるトランスカルチュラルな文化プロセスを文学というフィールドにおいて検証する。越境に関心の深い作家として例えば、日本語作家のリービ英雄や在日朝鮮人作家たち、英語圏におけるネイティヴ・アメリカン系作家やカリブ系作家、カズオ・イシグロなどの日系またはアジア系作家たち、ドイツ語圏ではモニコヴァなどチェコ系作家やエツダーマーなどのトルコ系作家、日本の多和田葉子などが挙げられる。彼らは母語ではない言語による作品を執筆しているか、あるいは居住国のナショナリズムないし主流文化に安住し得ない独自の文学を創出している。異文化の交流するなかで、ナショナリズムを超え、旧来の男女二項対立にとらわれない複眼的思考と、相対化ないし衝突する言語感覚を有する作家たちである。こうした文学的営為は、クレオール文化やハイブリッド文化、混血文化などと呼ばれる今日的な「越境文化」という大きな問題系に連関している。彼らの諸作品を分析対象として、自文化と他文化との交流する磁場において発現するトランスカルチュラルな経験の諸相、表現形態を明らかにすることが本研究の課題と目的である。また母語による作品であっても、テーマとして越境性を主題と

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

する作家たちの作品も本研究の対象となりうる。

4　研究概要

まず当該テーマに関する文献の収集と研究状況を調査した。そして当該テーマにふさわしい研究者たちや文学者たちを招聘し講演討論会を行う計画は、東欧ロシア現代文学研究者の沼野充義氏と日独作家の多和田葉子氏の両氏を招聘して実現させ、活発な討論会を行うことができた。以下にその概要を紹介する。

沼野充義氏「亡命文学の意味と可能性」:

20世紀のロシアやポーランド文学は亡命の問題と深くかかわっている。ロシアの亡命者は、1917年のロシア革命時代に約200万人の白系ロシア人が西欧やアメリカに渡った第一次亡命世代、第二次世界大戦中に亡命ないし難民として外国に逃れた第二次亡命世代、1970年代のデタント時代に合法的な移民あるいは亡命者としてイスラエルやアメリカに渡った第三次亡命世代に分けられる。この第三次亡命世代の代表的作家として、ソルジェニーツィン、シニアスキー、ブロツキー、ショーノフらが挙げられる。一方ポーランドは、文化的にも芸術的にも豊かな伝統を持ちながら、18世紀末に列強によって分割され消滅した歴史があり、19世紀前半に大量の亡命者を生んだ。優れた作家たちは皆フランスや西欧へ逃れた。亡命し越境する文学者たちはここで複数の言語に向き合い生活する。アメリカ留学中に知り合ったロシア亡命者たちとの付き合いの中で、母語でない言語で生きていくことの実態を知った。外国語を学ぶのは、異質なものに身をさらし違和感に耐えていくことだと思う。異質なものを無視して同化に生きがいを感じるのは、外国文化を考えることからむしろ遠ざかってしまう。難民の悲惨さと比べて亡命というとロマンチックなイメージがあるが、実は過酷な経験である。アメリカのブライトン・ビーチにはロシア人コミュニティーがあり、ユダヤ系ロシア人が多く住む。またシカゴはポーランド人の街ともいえる。亡命者の文学を理解するには、彼らの生きる実態について知るべきである。われわれ日本人には亡命ということの意味がわかりにくい。たとえば、島田雅彦の初期作品『亡命旅行者は叫びつぶやく』では、日本語ができないふりをしてロシアに行く日本人が最後には日本に戻ってくるという皮肉（亡命旅行者）が込められている。実は20世紀の文学、中国やロシア、第三世界、ラテンアメリカなどでは、亡命という現象は日常的に起こっている。日本は孤立した特別な社会であり、亡命者を受け入れるのも遅く、異質な文化を受け入れることに対して防御が硬い。アメリカなどは移民の社会である。亡命には栄光と悲惨の両面性がある。その実態は個々の作家により異なるが、言葉と向き合う宿命を持っている以上、厳しい選択をせまられる。ロシア貴族の生まれであるナボコフは、子供時から外国語を使っており、高いレベルの語学力をもっていたが、それでも英語作家となるのは大変な経験であったことが書簡から伺える。ジョージ・スタイナーが、ナボコフを「脱領域の作家」であり言語の放浪者と名づけたのは、やや過大評価であり、実際は最後

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

まで英語の不自由性を嘆いていたのである。一方ソルジェニーツィンは20年間アメリカにいたが、まったくアメリカ文化に触れなかった。多くの亡命者たちはこの両者の両極を動いている。別のケースとして、ジョゼフ・ブロツキーはチェコのクンデラに似て、独学ながら英語でもエッセイや晩年は詩も書いた作家だが、「言語には遠心力がある」と言っている。しかし母語の引力から逃れ宇宙に向かって拡大する加速力にはアンビバレントな部分があり、いわば命がけの飛翔ともいえる。

質疑応答では、内的亡命者の言語観の問題、ユダヤ人作家がドイツ語で書くことの意味、ユートピア文学との接点、ツェラーンやカフカの亡命者としての意味など、多岐にわたる興味深い質問が出され、活発な議論となった。

多和田葉子氏「Exophonie 日本語の外へ出る」:

母語の外に出るというテーマから思い浮かぶのは、いわゆる移民文学や亡命文学、マイノリティー文学という概念であろう。最近話題になっているフランスの旧植民地のクレオール文学もそのひとつである。母語以外の言葉で執筆する作家を指して、exophonな作家と呼ぶが、そこから私はそうした状況を表題のExophonieと命名した。ここ数年朗読会などで訪れた20の街で、様々な言葉の状況に遭遇したが、そのなかでまず、西アフリカのセネガルの首都であるダカール市で経験した状況を話したい。そのとき招待されていたドイツ語圏作家たちは、エレーニ・トローシー（ギリシャ女性作家)、マヤ・ハデラップ（スロヴェニア人オーストリア作家)、フーゴー・ロッチャー（スイス人作家）などである。セネガルの作家は、いわゆるピジンとかクレオールと呼ばれる植民地のフランス語で作品を書いているが、これはヴォルフ語（原住民語）が口語言語であるのに対して、フランスが読み書きの言語であるということにその理由があり、実は「模範的な正統的なフランス語」で書かれている。また数年前からは、ヴォルフ語で書く作家も出てきており、読者もいるし、なかには英語で書くセネガル作家も現れた。しかしピジン語は労働者の言葉として差別されているのも事実である。Exophonieというテーマで考えられるのは、ドイツ語圏文学で言えば、トルコ人やチェコ人がドイツ語で執筆している場合である。母語の外に出ると、どんな響きが聞こえてくるのかを考えたい。母語以外の言語で書くことは必ずしも悲しいことではなく、新しい言語と出会えるという可能性もある。あらゆる文学言語は、自主的に選び取られたものである。その場合「美しい国語」という価値基準はおかしい。変な言語も文学言語として認められるどころか、新たな可能性を秘めているともいえる。日本では外国語の習得が階級意識や差別意識を生み出すことが多々あるが、これは植民地主義的な発想であり、差別の道具として言語が使われている。アテネフランセで昔見た映画に『車に轢かれた犬』というのがあった。これは西アフリカ人の日本文学研究者の日本体験記であり、日本人のフランス語に対する屈折した憧れと劣等感を良く描いている。自分の母語も歴史によって様々の言語を背負わされていることを認識した。次にベルリンでクライストのシンポジウムがあった。参加者たちは、クライストの

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

翻訳全集のある国（日本、ハンガリー、フランス）から集まった。森鴎外に『大発見』という自伝的な短編があるが、そこには日本人留学生のベルリン滞在が描かれ、富国強兵と文明開化に貢献すべく、ひたすらプロイセンを丸呑みする留学生の覚悟を、ユーモアと距離を持って描いている。ここには草鞋と靴の対比で描かれる未開と文明の対比が見て取れる。清潔感が実は文化によって異なることを考えずに、押し付けられた衛生意識が日本を支配していったともいえる。さて、鴎外のクライスト翻訳は、一見年代記風にきちっとしているように見えて、実は樹木の細い枝が勝手に延びていって収拾がつかないクライストの文章、つまり欲望の動きを追っていく文章（悪文といわれる）を、枝葉を払った端正な文章に変えてしまっている。ここにもプロイセン的なものに無理にまとめようとする森鴎外のアンビバレンツな心情が表れている。興味深いことには、パリの朗読会では、なぜフランス語で書かないのかと聞かれたし、アメリカではなぜ英語でも書かないのかと聞かれた。パリ郊外にツェラーンの墓を訪ねたが、彼は「詩人はひとつの言語でしか詩を書くことができない」といった。様々の言語ができた彼のこの言葉は誤解されており、実際は構造として色々な言語が入り込んでいるドイツ語という意味ではないか。例えば彼の詩の中でNeige（傾き）という言葉が雪につながっていくのは、フランス語のneige（雪）だからであろう。つまり母語それ自体の中にも様々の言語が入っているのである。「美」という中国語で日本語の抽象名詞をつくったように。つまり日本語の外に出るというのは、特殊なことではなく、今の時代に必要最小限のことをすることである。

質疑応答にはいり、土着の言語と透明の言語の対立を問う質問に対して、ドイツ語で書く場合は、「世界は自分を理解しない」という前提に立って、はっきりと映像的に論理的に書くのに対して、日本語の場合はあまり意識化されないとの答えであった。書くという行為は、言語で書くことは不可能だという意識と、しかしきちっと書けるはずだという信念の狭間でゆれている。日本語とドイツ語がせめぎあいながら、ドイツ語を磨いていくと日本語も磨かれていくという感覚があり、二つの文化を両方ともしっかり維持していくことが重要である、文学は言語表現できないものを表現しようとする志向性のうえに成り立っており、そこに絶対的ないし実体的な価値付けを持ち込む必要はない。文学は何もなしえないものである。言語との格闘は苦しいけれども楽しい行為である。・・・などの意見が伺えた。

「越境の文学」をめぐる学際的な研究は、往々にして個々の国民文学別に行われてきたが、そうしたナショナルな言語・国民文学により分化されない視点から、日本語や英語、ドイツ語を表現手段とする諸作家の作品を、いわば横断的に共同研究することによって、それらのトランスカルチュラルな文化創造の持つ社会文化批判的メッセージを解明していきたいと考える。そのため学内共同研究者は、それぞれの関心分野にしたがって、越境文学をめぐる諸問題を考察しているところである。

（文責：土屋勝彦）

NII-Electronic Library Service